第３部　現代に対するインプリケーション

はじめに

以下では、現代に対するフォークランド戦争のインプリケーションについて、便宜上、政治及び外交の次元と軍事の次元に分けて考えてみよう。

第 11 章　政治及び外交の次元でのインプリケーション

フォークランド問題を取り扱うに当たって、サッチャーが常に念頭に置いていたのは、1956 年のスエズ危機の失敗であったと言われる。サッチャーはスエズ危機の歴史的な教訓として以下の点を挙げている[1383]。

①我々は決然としていない限り、そして、終結させる自信がない時には軍事作戦を行ってはならない。
②イギリスの国益に影響を及ぼす主要な国際的危機において、二度とアメリカをイギリスの反対側に回してはならない。
③我々は、我々の行動が国際法に則っているか確認しなくてはならない。
④躊躇する者は敗北する。

これを基にサッチャーが実行したのは、国際連合でのイギリスの正当性の強調、良好な英米関係の維持、「戦時内閣」による戦争指導と自身の断固とした決意、ということになる。おそらく、これら要素のどれが欠けてもフォークランド諸島の迅速な奪還という困難な目的は達成されなかったであろう。

そしてサッチャーによるフォークランド戦争の指導は、日本にも様々なインプリケーションを提示している。

外交的にはもちろん、国際連合や日米関係の重要性は言うまでもないが、自国が苦境に置かれた時、はたして国際社会からどれ程の支援を得られるかについて常に検討しておく必要がある。フォークランド戦争において、アメリカ、英連邦諸国、そして当時の EC あるいはヨーロッパ諸国はイギリスを支援した。日本政府は国連安保理決議には同意したものの、対アルゼンチン経済制裁には賛同しなかっただけでなく、6 月 4 日の即時停戦案に賛成してサッチャーを困惑させた経緯がある[1384]。

確かに、フォークランド戦争は当時の東西冷戦の枠外で起こった出来事であったため、日本としては対応が難しかったことも想像できるが、仮に日本が同じような領土問題に直面した場合、はたしてどれだけの国が日本を支援してくれるのかについて検討しておかなくてはならない。

危機管理に関しては、戦時内閣による戦争指導という制度も着目に値する。フォークランド諸島の奪還

[1383] Margaret Thatcher, *The Path to Power* (London: HarperCollins, 1995), p. 88.
[1384] マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993 年、上巻、293 頁。さらには、同書の 241 頁も参照。

という極めて困難な状況に直面したサッチャーは、議会制民主主義と合意による政治が基本のイギリスという国家において、全ての権限を戦時内閣に集中し、迅速かつ柔軟な意思決定の仕組みを確立した。この仕組みは今ではイギリス版国家安全保障会議（NSC）として制度化されており、もし今後、万が一、フォークランド問題が再燃しても、イギリスは NSC という制度化されたシステムによって危機管理を行うことができるであろう[1385]。

今日、日本でも NSC が始動し始めたところであり、フォークランド戦争におけるイギリスの経験は、日本版 NSC にとっても教訓の宝庫だと言える。それらは例えば、NSC における政軍関係や、危機管理の際にいかに情報を集約し、政治家の決定につなげるのか、また割拠性の強い官僚組織をどのように従わせるのか、といった課題である。

そして最後に重要になってくるのは、やはり首相のリーダーシップや決断力といった、いわゆる術（アート）の部分となる。

この部分だけは NSC のように制度化することができないが、依然として重要な要素である。フォークランド戦争中、サッチャーには国内外からの停戦を求める圧力が掛かり続け、時には盟友のレーガン大統領から説得されることすらあったにもかかわらず、戦争を遂行し、フォークランド諸島を奪還するという断固とした態度を維持し続けた。この点でも日本は学ぶべき点が多いであろう。

[1385] 実際、2011 年のリビア介入は NSC が主導して実施された。House of Commons, Official Report, 1 Dec 2011; Peter Hennessy, “Libya Crisis,” in Peter Hennessy, *Distilling the Frenzy* (London: Biteback Publishing, 2013), p. 110.